

マグネ事業で新会社

独自技術を駆使 車向け開発視野

電池事業や照明事業を手掛けるCoccolo(本社＝神奈川県横浜市、豊郷和之社長)は、マグネ事業に特化した新会社「東通工」を今月設立した。主力事業と位置付けるマグネ電池は、長期保存やリサイクルが可能だけでなく、「塩水だけでなく蒸留水で動く電池はおそらく弊社のみ(豊郷社長)」と独自技術で強みを持つ。将来は自動車に搭載するマグネ電池の開発も行う。

循環系ビジネス構築も

初年度(2013年)の売上げ計画は30億円、4年後の16年には1000億円を指す。リチウムイオン電池関連事業は今後も並行して進める。「東通工」の社名は、ソニーの前身である「東京通信工業」と同じ19万円。ただ、12カ月後には「第三



マグネ電池を使用したローソク型の商品

者割増資によって億を超える見込み(豊郷社長)。大手材料メーカー

ーや主に半導体を扱う大手商社などが資本参加する予定。社員は7人でスタート。東通工は、独自技術を駆使したマグネ電池を開発。通常の乾電池であれば電気を点けると約2日で消えるが、マグネ電池は約1カ月間持つ。マグネ電池は長期保存が可能で、電解液を入れなければ100年後でも動くことから、非常用の電池に向いている。また、リチウム電池と違い、マグネ電池の電解液は間違っても体内に入っても安全性が高い。

マグネ電池の商品の中でも、ローソク型の受注を多く受けたことから、13年度の売上げ目標計画も「達成できるめどがつきそうだ(豊郷社長)」。

東通工は、太陽光を使った循環系ビジネスの構築にも力を入れていく。マグネシウムは、太陽光を電気エネルギーに変換する触媒にもなる。循環系ビジネスがある程度確立して、マグネの回収率が上昇すれば、コストはマグネの循環費用のみになる。また、マグネシウムに関連した水ビジネスも行う。マグネシウムは地球上で8番目に多い物質で海水に1800兆ト含まれる。そのため、海水からマグネシウムを抽出する事業も行う。

数年先の大きな目標は、軽自動車に搭載するマグネ電池の開発。リチウム電池搭載の自動車よりも大幅に低価格になる可能性があるという。リチウムは地球上に400万トしかないのに対し、マグネは1800兆トと圧倒的に量が多い。マグネの抽出とリサイクルが可能になれば「リチウム電池の10分の1以下の価格」に抑えられる可能性があるという。

豊郷社長はソニーに25年間勤務し、リチウムイオン電池の開発やマーケティングなどを担当。1990年代前半にはマーケティング

部長として、リチウムイオン電池を米サムライクロシシステムズやデルコンピューターなどに販売した経歴を持つ。

Totsuco

東通工株式会社 紹介記事

2013年2月19日産業新聞